慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ラインホルト・ニーバーの人間性論について
Sub Title	
Author	田部井, 善郎(Tabei, Yoshiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1977
Jtitle	哲學 No.66 (1977. 9) ,p.184- 185
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	三田哲学会例会発表要旨
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000066-0184

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

<三田哲学会例会発表要旨・1977年6月1日・於　三田塾監局第三会議室>

ラインホルト・ニーバーの人間性論について

田　部　井　善　郎

Niebuhr の倫理思想の根底には，旧約聖書の解釈に基づく人間性論がある．「Nature and Destiny of Man」の第一部「Human Nature」及び「An Interpretation of Christian Ethics」を中心に，その人間性論を考察してみたい．

Niebuhr によれば，キリスト教人間性論の特徴は，人間の存在を次の三つの側面で解釈し，それらを相互に関連づける，その仕方である．

第一は，人間には他の生物にはない程の高き自己超越性があることを，「神の像」の教説（創 1:27, 2:7）に基づき主張する点である．Niebuhr はこの自己超越性を人間のみに与えられた霊的高さ（spiritual stature）と理解する．聖書によれば，人が「生きた者」となったのは，神の息が吹き入れられたからである．「生きた者」すなわち「nepheš ḥāyyāh」の「nepheš」とは，後に φυχή (soul) と訳され，「生命の原理」を表わす様になるが，本来の意味は「風」「息」であった．この「風」「息」を表わすヘブル語には別に「rûach」という言葉もあり，後に πνεῦμα (spirit) と訳され，「神と関わる器官」を表わすものとなるが，その本来の意味は「nepheš」と同じであった．こうした用語法より Niebuhr は，ヘブル思想においては，soul と spirit は，時に後者は前者の原理であると区別されることはあっても，決して切離されて考えられることはなかったと指摘する．従って，人間も単に body の統一としての soul であると考えられるだけではなく，body・soul の双方を超越する能力たる spirit として理解されていたのである．しかもこの spirit は本来神に属し，神より与えられた賜物である．かかる spirit を持つ人間は，それ故に神的能力，神との類似性を有するのであり，それが神のごとき高き自己超越性である．これがキリスト教人間性論の理解する人間存在の第一の側面である．

第二のキリスト教人間性論の主張する側面は，人間がその神的能力及び神との類似性ゆえにいかに高い自己超越性を有するものであろうとも，一方においては，人間もまた他の生物と同じく，自然界の必然性・偶然性に含まれる有限な存在にすぎないということである．聖書によれば「人間」すなわち「'ādām」は，「土」すなわち「'ᵃdāmāh」より創造されたのであり，素材的には「土」なる物質であって，それ故に，いつかは「土に帰る」存在にすぎない有限なる被造物である．これが第二の人間の存在についての主張である．

以上，第一，第二の点より，最も純粋な形のキリスト教の理解する人間とは，「最も高い spiritual な次元に於ても被造物に留るものであるが，しかし，最も低い自然的生命の側面に於てさえも，神の像たる要素を示すもの」と表現される．注目すべきは，かかる人間の本性は，それ自体決して悪とは見做されないことである．人間の有限性，被造性は何ら悪ではなく，むしろ神の被造物である限り，善なるものと考えられるのである．

しかし，それにもかかわらず，キリスト教人間性論は，人間存在の第三の側面として，人間にとって悪は必然的でないが，避けがたいものであると理解する．既述のように，キリスト教人間性論によれば，人間は自己超越性を有する唯一の被造物である．すなわち，人間は自己自身を超えた視点から自己を理解することができるのである．従って，人間は自己が自然の必然性の中に含まれる不安定な存在であることを知っている唯一の被造物である．Niebuhr によれば，かかる自己を知り得る状況こそ，人間の悪が避け難く生ずる場と考えられる．なぜならば，その自己超越性ゆえに，自らの有限性を知る人間は，何らかの形で，かかる状況を克服せんと試みるからである．しかし人間の自己超越性はどんなに高きものであっても，その範囲は被造物としての限界を超えるものではない．人間の自己超越性は，自己の存在を理解せしめても，それを抱括せしめることはできない．にもかかわらず，人間はその自己超越性ゆえに，被造性に留まることに不安を憶え，満足し得ないのである．この有限性に留まることに承服し得ないことこそ，人間の自己中心性に他ならない．その結果が悪である．自らの状況を知り得る人間には，その状況に従う可能性も残されている．従って，悪は人間の状況の必然的結果ではない．そうではなく，自らの状況を知る人間は，その意志に於て状況を克服せんとするが故に悪を避けることができないのである．この悪の概念の聖書的基盤は，堕罪の神話（創3：1～6）である．狡猾なるへびは，人を誘惑して言う，「それを食べるとあなたがたが神の様になることを神は知っている」と．この言葉は誘惑であって，命令ではない．従って人の応答は，「神の様に」ならんとする意志による．善なるものとして創られた人は，自らの意志によって悪へ堕落する．「悪は善の欠如ではなく，その腐敗である」．人間が被造物であることに満足せず，自らが創造者たらんとする，かかる意志を，「高ぶりの罪」(sin of pride) と Niebuhr は言う．罪の宗教的次元は神への反逆であり，社会的・倫理的次元は不正義である．Niebuhr は具体的な罪の現れとして，(1) 権力への高ぶり，(2) 知識の高ぶり，(3) 徳の高ぶり，(4) 霊的高ぶり（自己神格化）を指摘する．以上が第三の側面であり，Niebuhr の人間性論の中心である．